

# 河野水軍の守り神、大山祇神社

## 十七神社に本地仏信仰

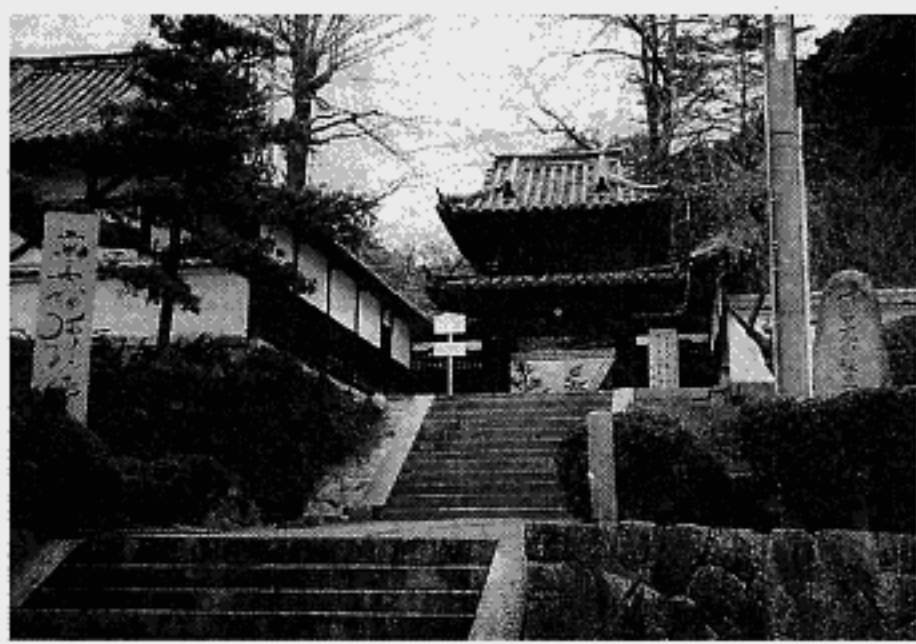
### 化城喩品 王子の数に由来か

予国一宮・大山祇神社の御祭神の大山積大神は本・国宝館)の他に、昭和来「地神・海神兼備」だが、河野水軍ゆかりの神社のイメージが強く、今でも海上自衛隊が「訓練の名目で参拝に来る」という。境内には現在、国宝・重文に指定されている武具類のうちの八割

予国一宮・大山祇神社の御祭神の大山積大神は本・国宝館)の他に、昭和来「地神・海神兼備」だが、河野水軍ゆかりの神社のイメージが強く、今でも海上自衛隊が「訓練の名目で参拝に来る」という。境内には現在、国宝・重文に指定されている武具類のうちの八割

# 伊予の生地、上人一遍

鎌倉御家人の河野氏を海賊と呼ぶのは適切ななか、海賊かそれとも水軍か。河野氏が氏神として宗めた大山祇神社(愛媛県越智郡大三島町)の三島喜徳宮司にうかがうと、「海族」と読み替えては、と教示された。伊



一遍上人の木像を安置する道後温泉の寶嚴寺

この中世の名族河野氏が一人の有名な宗教者を生み出したことはよく知られている。一遍智真、時宗の祖である。遊行の上人一遍の足跡は、北は岩手から南は鹿児島まで日本各地に残されているが、伊予は上人の面影を偲ぶのにやはり最もふさわしい土地だろう。上人ゆかりの遺跡も多い。地元には宗派・宗旨という枠を超えて、「一遍さん」と敬愛を込めて上人の名を呼ぶ人たちがいる。

泉の時宗・寶嚴寺で、その一人の有名な宗教者をうした人たちが集う一遍会の世話人(理事)三好恭治さんにお話をうかがった。同寺の長岡隆祥住職の「二先祖はこの辺りの庄屋さんですよ」という紹介に、なるほどと頷きたくなる温厚な知識人という印象だ。

一回会が誕生したのは昭和四十五年。寶嚴寺が会の活動の一つの拠点に、東大寺の大学僧凝然元(二三九)年、凝然代、一遍上人から十代廻

今回、一遍上人のこと大徳が上人と同郷、しか大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

## 『聖絵』テキストに学ぶ

### 寶嚴寺に集う一遍会員ら

泉の時宗・寶嚴寺で、その一人の有名な宗教者をうした人たちが集う一遍会の世話人(理事)三好恭治さんにお話をうかがった。同寺の長岡隆祥住職の「二先祖はこの辺りの庄屋さんですよ」という紹介に、なるほどと頷きたくなる温厚な知識人という印象だ。

## 縁続きの凝然大徳

### 一遍と同時代、東大寺に

今回、一遍上人のこと大徳が上人と同郷、しか大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

## 現地に見る 宗教史の風土

愛媛県



今治市延命寺にある凝然大徳の供養塔

大徳はその翌年の生まれを少し調べているうち、同時代人であることを知り、系図上では、凝然大徳(新居氏)から九

(津村忠史)



本地仏大通智勝仏への信仰を物語る?大山祇神社の十七神社

神の順序は県内に幾つかある十六王子社(その神社の主祭神はいずれも大山積大神)と一致しているに受け継がれてきたと考

えられるわけだが、この「十六」という数字は一体どういう意味を含んでいるのか?

従来、越智郡の島根部に散在した神社を合祀した、と理解されてきた。うだが、三島宮司はそれを、法華経の化城喩品に出る大通智勝如来が出家前にもうけた十六人の王子と解釈する。

そういえば、「河野家譜」にも、三島明神が十六丈の大蛇になって出現した、とあり、十六はキーワードになっている。

「まず、ローカルな関心の謎の解は、河野氏に深くかかわる大山積大神の本地仏への信仰にあったのだ。

人が修行した「閑室跡」へ向かう途中、今治に立ち寄り、凝然大徳の遺跡を巡った。しかし、泰山寺の近傍の生誕地を示す木札があった場所は宅地となっていた。

かろうじて圓明寺が改号・移転した同じ今治市内の延命寺(真言宗豊山派、五十四番札所)にはまだ新しい「至徳凝然國師供養塔」を見いだすことができた。

「沙門凝然」の著者、故・越智通敏氏(氏は一遍会の代表でもあった)は鎌倉新仏教を代表する一人である一遍上人と、いわゆる「旧仏教」の有数の大学僧凝然大徳との間に、何らかの交渉があったことをうかがわせる史料・伝説が全くないことを指摘。臨終前に所持の書籍を焼き、「一代聖教みなつきて、南無阿彌陀仏になりはてぬ」と語った前者に「一遍聖絵」など多くの伝記資料があるのに対し、膨大な著述を残した凝然大徳にかえってその生涯を知る資料が乏しいことを特記している。

越智氏によれば、文献に「佐保山に葬り、鷲尾山に塔す」とある鷲尾山は現在の京都東山・高台寺だが、その鷲尾山の凝然大徳墓も今は所在が知れない、という。

中世の伊予に生まれた二人の偉大な僧侶は、まことに対照的な生涯を歩み、没後の運命もまた際違ったコントラストを示しているのである。